第３部　「初期ヤマト王権」の実体

第１章　饒速日命と纒向遺跡

1　「初期ヤマト王権」のはじまり

(1) 纒向遺跡

纒向遺跡は奈良県桜井市にある。三輪山の北の巻向川が流れて形成する扇状地にある。

図 30　纒向遺跡　（『日本の古代遺跡５　奈良中部』（保育社）より）

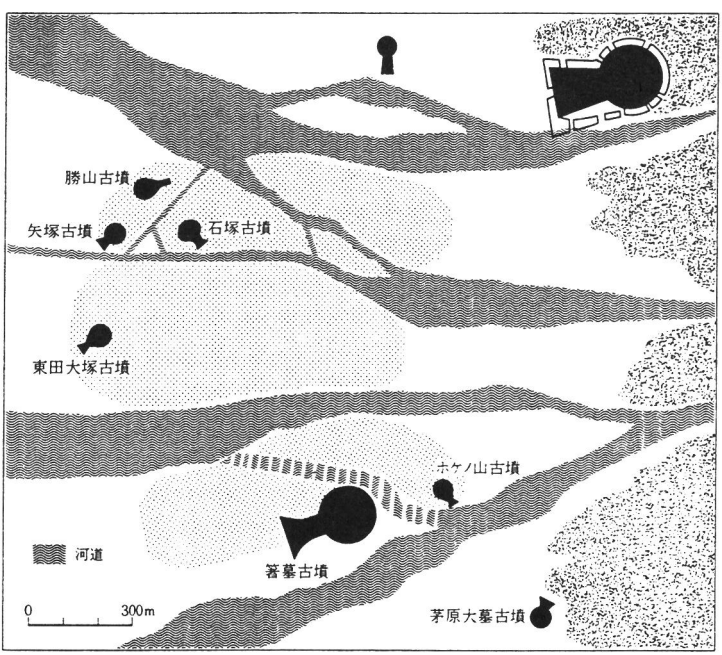


図 30　纒向遺跡

寺沢薫氏は、初期ヤマト政権は纒向遺跡からはじまるという。『橿原考古学研究所論集　第六』（吉川弘文館）所収の「纒向遺跡と初期ヤマト政権」の中で概略次のように述べている。

□纒向遺跡

３つの区画に分けられる。太田北微高地・太田微高地・箸中微高地。

○纒向遺跡の規模

纒向遺跡は環濠集落を形成していないようである。

■太田北集落　……　約２４万㎡

■太田集落　……　約３０万㎡

■箸中集落　……　約２２．５万㎡

弥生時代の母集落として最大級といわれている唐古・鍵遺跡の推定規模は２２万㎡であるから、纒向遺跡の一単位集落が弥生時代最大の農耕集落にまさるとも劣らない規模を有している。

○纒向遺跡の形成

纒向遺跡は、纒向一式期に太田北集落を中心として突如として形成される。時をおって最も広大な生活空間を有する太田集落が主体化していくことで最盛期をむかえ、箸墓古墳の造営のはじまる纒向三式期以降における箸中集落の盛行とあいまって空間的なピークに達し、四式期をへて五式期以降には急速に衰退していく。

○纒向遺跡の古墳

■太田北微高地

勝山古墳・矢塚古墳・石塚古墳

■太田微高地

東田大塚古墳

■箸中微高地

箸墓古墳・ホケノ山古墳

纒向遺跡の古墳群は寺沢氏が「纒向型前方後円墳」と名付けているように、同一の規格と造営技術のもとに造られている。造営年代は畿内の庄内式ー布留０式併行期に限られる。

○石塚古墳

■全長９３ｍ、前方部がバチ型に開く。前方部前面に狭い溝を持つようである。

■周溝底からの出土物…長柄鋤、着柄鋤など鋤１５、広鍬１などの大量の農耕・土木用具、鶏形木製品、弧文円板、異形蓋状木製品、朱塗板、円座様網製品など、祭祀的色彩の濃厚な木製品を検出している。

■石塚古墳の時期…周溝最下層の一括土器群から纒向一式と考えることもできるが、直上の灰色砂層より庄内型甕も検出されているので二式期に下がる可能性だけは考慮しておく必要があるだろう。

○矢塚古墳

■全長９６ｍ。最下層より纒向三式の土器が一括出土している。

○勝山古墳

■全長約１００ｍ。後円部と前方部との間に連結部をもつ特異な柄鏡形の前方後円墳。正式な調査がないため築造時期を知る直接的な手だてはないが、前方部下で纒向二式土器の堆積が報じられているので、纒向二式期以降、おそらく三式期の築造と考えたい。

■墳丘に接する勝山池が周濠の一部であれば、その形状は逆台形周濠であったのではないかと思われる。このことは時期的に後出する定型化した大形前方後円墳とされる桜井茶臼山古墳がより完成された柄鏡形を呈し、しかも、逆台形の特徴的な周辺区画をもっているという指摘と考えあわせると、発展系譜上きわめて興味深い。

○東田大塚古墳

■全長９６ｍ。後円部と前方部間に連結部をもつ特異な形式。

■過去に「石の机」が出土したと伝えられるが、墳丘上で纒向四式以降の土器は採集されないので、築造時期はやはり纒向三式頃に求めるのが妥当であろう。

○箸墓古墳

■全長２８０ｍ。墳丘形態や比率も完成された前期大形前方後円墳の典型といえる。

■築造時期…後円部頂出土の特殊壺形埴輪や特殊器台形埴輪、また前方部中央出土の二重口縁壺から纒向三式新相（布留０式）であろう。

○ホケノ山古墳

■全長９０ｍ。東田大塚古墳と同範型の企画性をもつ。

■築造時期…東田大塚古墳と同時期。

□纒向遺跡の築造時期は石塚古墳の纒向一式ないし二式期を初源として、最も新しい箸墓古墳の纒向三式新相（布留０式）期までである。

寺沢氏はこのように述べ、纒向遺跡の特徴を次のようにまとめている。

①集落規模がきわめて大きく、弥生時代以来の拠点的な一般農耕集落規模をはるかに凌駕した都市的規模をもつ。

②弥生時代にはむしろ、過疎的であった纒向地域への突然のこの大集落の形成が、周辺の前期大型古墳の繁栄、消長と軌を一にしている。

③集落内に非在地性、企画性の強い発生期前方後円墳群をもち、祭式一切を実現している。

④鍬、鋤の比率からみて農耕具的色彩は稀薄であり、逆に、大溝の性格等も考慮に含めると纒向遺跡の造営など大土木事業に供された可能性が強い。

⑤吉備型葬送儀礼の一表徴たる特殊埴輪や弧帯文様が、天的な祭祀とともに纒向諸古墳に受け継がれていった可能性がある。

⑥搬入土器が量的にきわめて多いというだけでなく、比類のない対象の地域的広がりをもっている。
⑦大和東南部が交通上の利点を有しているばかりでなく、纒向遺跡付近には「大市」の存在が予測され、かつ「市」名墨書土器も検出されている。
⑧建物跡群中に、ほぼ真北方向に企画され、かつ柵（垣）をめぐらし付属建物を配するようなきわめて特殊な掘立柱建物が存在する。（例えば宮殿や神殿）
纒向遺跡は初期ヤマト政権の最初の都宮であった可能性を考えてみたい。

大和の弥生集落が消滅した後、都市とも思われる纒向遺跡が出現し、宮殿か、神殿と思われるような建物が建てられる。各地から土器も搬入される。寺沢氏は、纒向遺跡は「初期ヤマト政権」の最初の都宮であろうと考えている。

(2) 纒向遺跡のはじまりと弥生集落の消滅

寺沢薫氏は纒向遺跡が出現するときの大和平野における集落の消長について『橿原考古学研究所論集　第四』（吉川弘文館）所収の「大和弥生社会の展開とその特質」の中で概略次のように述べている。

> 纒向１－３期に、大和における弥生遺跡の最大の画期があった。存在した母集落１２例のうち、実に１０例が消滅する。集落総数では５９例のうち、９例だけが継続する。
> この母集落と基礎地域の急激な消滅という事態は、前期から継続したきわめて安定した姿での農業共同体世界の内的発展を根底からくつがえすものであり、地域中心を荒廃させ、かつての集落の結合関係や地域の統一を寸断・解体させるほどの歴史的事態を想定させずにはおかないであろう。それは大和盆地という地理的にも大きな完

結体が、もはやより大きな政治的権力によって一方的な政治的再編（あるいは軍事的・宗教的統合）を余儀なくされる過渡的な状況を示してはいないだろうか。

「纒向１－３期」は現在の編年では庄内０－２式期にあたる。纒向遺跡はこの時期に大きな画期があったという。それまで継続してきた大和の弥生集落のほとんどは消滅し、突如として纒向遺跡が出現する。それは一方的な政治的再編、あるいは軍事的・宗教的な再編であろうと述べている。

(3) 纒向遺跡の年代

纒向遺跡の年代について、寺沢薫氏は『東アジアの古代文化』６９号（大和書房）の中で次のように述べている。

纒向遺跡は一般的な言い方をすると庄内式といわれている時期にほぼ合致した遺跡です。庄内式の古い段階が造営の開始時期で、庄内式の新しい段階と私が布留０式と呼んだ段階の二つの段階が纒向遺跡のピークです。
庄内式の一番古い段階は三世紀の第１四半期の中に収められるのではないかと思います。布留０式は箸墓古墳の年代だと思っていますが、その大きな画期というかピークがあるのは三世紀の第４四半期に入るころだと考えているわけです。

纒向遺跡は庄内式の古い段階から造営がはじまるという。庄内式の古い段階とは庄内０式である。庄内０式は三世紀の第１四半期の中に収まるころであるという。纒向遺跡が出現する時期は２００－２２５年ころである。

(4) 纒向遺跡の衰退

寺沢薫氏は『東アジアの古代文化』６９号（大和書房）の中で纒向遺跡の衰退する時期を次のように述べている。

> 庄内式の新しい段階と、私が布留０式と呼んだ段階の二つの段階が纒向遺跡のピークです。布留１式の段階まで遺跡は続きますが、２式以降はかなり縮小していきます。

纒向遺跡は庄内式の新しい段階と布留０式の箸墓古墳の時期がピークであり、その後は次第に衰退していくという。

寺沢薫氏は『下池山古墳、中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所編（学生社）の中で布留０式期の実年代を次のように述べている。

> 箸墓古墳の築造開始から完成までの三段階がすべて「布留０式」の範疇におさまることを示しており、箸墓古墳の築造時期はこの時期をおいてはありえないことになる。（中略）
> 私は布留０式の実年代を西暦２８０－３００年頃と考えておきたいが、その精度からして当然、プラスマイナス１０－２０年の修正は将来必要となろう。

箸墓古墳が造られた布留０式の実年代は２８０－３００年ころであるという。その後、纒向遺跡は衰退していく。

2　饒速日命

(1) 饒速日命（にぎはやひのみこと）とは

饒速日命は神武東征の動機となる人物である。

> 塩土老翁（しおつちのおじ）に聞く。曰く、「東に美地有り。青山四方にめぐれり。その中に亦天の磐船に乗り、飛び降りる者有り。」という。（中略）その飛び降りるは是饒速日と謂うか。何ぞ就（ゆ）きて都をつくらざらむ。　『紀』

神武天皇は、饒速日命が東の美地に天の磐船に乗り天より降りてきたということを聞いて東征を決意している。

饒速日命は神武天皇が長髄彦と戦うときにも出てくる。

> 時に長髄彦、乃ち行人を遣わして、天皇に言いて曰く、「嘗て、天神の子、天の磐船に乗り、天より降りぬ。号して櫛玉饒速日命という。是吾が妹三炊屋媛（みかしきやひめ）を娶り、遂に子息有り。名は可美真手命（うましまでのみこと）という。故、吾は饒速日命を以て君と為し、奉（つか）えまつる。それ天神の子、豈（あに）両種（ふたはしら）有りや。いかにぞさらに天神の子と称して以て人の土地を奪わむや。（中略）（天皇）乃ち（長髄彦を）殺す。其の衆を帥いて帰順す。天皇、素（もと）より饒速日命が天より降り来る者であることを聞く。而して今は果たして忠郤（真心をつくす）を立つ。則ち褒めて之を寵す。此物部氏の遠祖也。　『紀』

大和平野にはもともと長髄彦が居た。そこへ饒速日命が天（朝鮮半島）よりやってきた。長髄彦は「天神の子」である饒速日命に仕える。饒速日命は長髄彦の妹を娶り、大和平野を支配する。

そこへまた「天神の子」と称する神武天皇が来た。長髄彦は「どうして天神の子が二人いるのか」と疑う。

神武天皇は遂に長髄彦を伐ち、大和平野の東南部を手に入れる。饒速日命は神武天皇の支配下に入る。神武天皇は「則ち褒めて之（饒速日命）を寵す。此物部氏の遠祖也。」とある。

(2) 饒速日命と天孫降臨

饒速日命は神武東征の時代の人である。ところが饒速日命は天孫降臨したという伝承もある。『先代旧事本紀』は次のように書いている。

> 天照大神詔して曰く、「豊葦原（とよあしはら）の千秋長五百（ちあきながいほ）秋長（あきなが）の瑞穂国（みずほのくに）は吾が御子正勝（まさかつ）勝速日（かちはやひ）天押穂耳尊（あまのおしほみみのみこと）の知らすべき国なり。」と言（こと）寄せして詔りたまう。而して天降（あまくだ）したまう時、高皇産霊尊（たかみむすびのみこと）の児思兼神（おもいかね）の妹萬幡秋津師姫（よろずあきつしひめ）栲幡千千姫命（たくはたちぢひめのみこと）を妃と為し、天照国照彦（あまてるくにてるひこ）天火明（ほあかり）櫛玉饒速日尊（くしたまにぎはやひのみこと）が誕生した時、正哉吾勝勝速日天押穂耳尊奏して曰く、「僕は将に降りようとして装束をしている間に生まれた児有り、之を降ろすべし。詔してこれを許す。（中略）

饒速日尊は天神の御祖の詔（みことのり）を受けて、天の磐船に乗り、河内国の河上の哮峯（いかるがのみね）に天降る。則ち大倭国鳥見（とみ）の白庭山に遷り住む。（中略）饒速日尊は長髄彦の妹御炊屋姫（みかしきやひめ）を娶り、妃と為し、妊胎（はらま）しめたまう。産むときにおよばざるに饒速日尊既に神殞（かみさり）まして復た天に上りたまわず。時に、高皇産霊尊、速飄神（はやちのかみ）に詔して曰く、「吾が神の御子饒速日尊を葦原中国に使わす。而かるに疑い思うこと有り。（後略）」

『先代旧事本紀』天神本紀

『先代旧事本紀』では饒速日命は天孫降臨している。天孫降臨は紀元前１００年頃のことである。（古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』参照）

神武東征は紀元後２７０－２８０年頃である。約４００年の開きがある。饒速日命が天孫降臨するはずはない。

饒速日命が神武東征の時期の人であることは明らかである。

第１に、『紀』や『先代旧事本紀』は、饒速日命が長髄彦の妹御炊屋姫を娶ると書いている。長髄彦は神武天皇と戦っている。神武天皇と長髄彦は同時代の人である。したがって饒速日命とも同時代ということになる。

第２に、饒速日命の長男である天香語山命も神武東征の時に出てくる。『先代旧事本紀』は天香語山命について次のように書いている。

（饒速日命は）天道日女命を妃と為し、天上にて天香語山命を誕生す。御炊屋姫を妃と為し、天降りて宇摩志摩治命を誕生す。（中略）天香語山命は御祖天孫の尊に随い、天より紀伊国熊野邑に降りし時、磐余彦尊が西の宮から発ち、親（みずか）ら船軍を帥いて東征する。その時、往々にして命（みこと）に逆（そむく）者蜂のごとく起こり、未だ伏さず。中州（うちつくに）の豪雄長髄彦は兵をととのえ、相距（ふせ）ぐ。　『先代旧事本紀』

天香語山命は饒速日命が天（朝鮮半島）に居るときに生んだ子である。天香語山命は紀伊国の熊野邑に渡来したという。そのとき神武天皇が軍を率いて来たとある。饒速日命の子の天香語山命は神武東征の時期の人である。

第３に、饒速日命が大和へ渡来して生んだ宇摩志摩治命も神武東征の時に出てくる。

> 時に宇摩志摩治命は舅（長髄彦）の謀に従わず、很戻（こんれい＝ひねくれて道理に逆らう）を誅殺して、衆を帥いて帰順す。
>
> 『先代旧事本紀』

宇摩志摩治命は長髄彦を殺して神武天皇に帰順している。

このように饒速日命は神武東征の時期の人であり、天孫降臨するはずはない。

『先代旧事本紀』が天孫降臨したと書いているのはおそらく饒速日命が「天より天の磐船に乗り天降る」とあるからであろう。「天より天降る」とあるのをみて『先代旧事本紀』の編纂者は単純に「天孫降臨である」と解釈したのであろう。饒速日命の天孫降臨の記事をみると『紀』の天孫降臨の記述とよく似ている。「邇邇藝命」を単に「饒速日命」に置き換えているだけである。

「天」は「天界」を指しているのではない。朝鮮半島を指している。饒速日命は朝鮮半島から渡来している。それを「天より天降る」と表現しているのである。

平井進氏は『古代文化を考える』３５号の「『日本書紀』の地理的世界」で次のように書いている。

> 神饒速日命の後裔に韓国連がある（『新撰姓氏録』和泉国神別）。河内国の辛国神社（「延喜式」社）は饒速日命を祭っており、辛国は韓国である。

『新撰姓氏録』には次のように書いている。

○『新撰姓氏録』和泉国神別・天神（てんじん）
■采女臣（うねめのおみ）…神饒速日命の六世の孫、伊香賀色雄命の後なり。
■韓国連（からくにのむらじ）…采女臣と同じき祖。
○『新撰姓氏録』摂津国神別
■物部韓国連…伊香賀色雄命の後なり。

韓国連の祖は饒速日命である。饒速日命が韓国から渡来してきたのでその子孫は「韓国連」を称している。これらの氏族は饒速日命が韓国から渡来してきたことを代々伝承しているのである。

このように「（饒速日命が）天（韓国）より天降る」という伝承をみて、『先代旧事本紀』の編纂者は天孫降臨のことであると間違って解釈したのである。饒速日命は神武東征の時期の人であり、天孫降臨をしたとあるのは間違いである。

(3) 饒速日命と宇摩志摩治命

饒速日命は大和に渡来して長髄彦の妹、御炊屋姫を娶り、宇摩志摩治命を生む。

> 天道日女命を妃と為し、天上にて天香語山命を誕生す。御炊屋姫を妃と為し、天降りて宇摩志摩治命を誕生す。　『先代旧事本紀』

宇摩志摩治命は神武天皇と対戦する。

> 中洲豪雄長髄彦は本より饒速日命の子の宇摩志摩治命を推して君と為し、奉（つか）えまつる。此に至り乃ち曰く、「天神之子、豈（あに）両種（ふたくさ）有らんや。吾は他に有ることを知らず。遂に兵をととのえ之を距（ふせ）ぐ。（中略）
> 時に宇摩志摩治命は舅（長髄彦）の謀に従わず、很戻（こんれい＝ひねくれて道理に逆らう）を誅殺して、衆を帥いて帰順す。
>
> 『先代旧事本紀』

長髄彦は宇摩志摩治命を君として仕えたとある。宇摩志摩治命は長髄彦の甥にあたる。宇摩志摩治命は伯父の長髄彦を殺して神武天皇に帰順している。

この戦いに饒速日命は出てこない。饒速日命はすでに死去している。『先代旧事本紀』は次のように書いている。

> 饒速日尊は長髄彦の妹御炊屋姫（かしきやひめ）を娶り、妃と為し、妊胎（はらま）しめたまう。産むときにおよばざるに饒速日尊既に神殞（かみさり）まして復た天に上りたまわず。
>
> 『先代旧事本紀』

饒速日命は長髄彦の妹御炊屋姫を娶り、妊娠させた。ところが生むときには「饒速日尊は既に神殞（かみさり）まして復た天に上りたまわず。」とある。宇摩志摩治命が生まれるときには饒速日命はすでに死去している。

神武東征の時「豪雄長髄彦は本より饒速日命の子の宇摩志摩治命を推して君と為し、奉（つか）えまつる。」とある。饒速日命はすでに死去しているからである。

『記』『紀』では神武東征に饒速日命が出てくる。饒速日命はあたかも健在であるかのように書いている。しかし『記』『紀』には饒速日命についての具体的な記述がない。すでに死去しているからであろう。

3　神武天皇の実年代

(1) 神武天皇の死亡年齢

神武天皇と関係のある人物は多い。神武天皇の実年代が判明すると関連する多くの人物の年代がわかり古代史の解明は前進する。

神武天皇には伊都国（日向）にいるとき二人の子がいた。

> 日向に座しし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比売を娶りて生める子は多藝志美美命、次に岐須美美命、二柱座しき。　　『記』

東征には長男の多藝志美美命だけを連れて行く。弟の岐須美美命は母と一緒に伊都国に留まったのであろう。年少だったからと思われる。

東征に連れて行くには少なくとも１０才以上にはなっているであろう。１０才以下では足手まといになる。多藝志美美命は１０才以上になっていたと仮定しよう。

中国の書に「３０世代、７００年」とある。一世代の平均は約２３年である。２３才で生まれた子が平均して次の世代を引き継ぐということである。

世代は長男が継承するとは限らない。末子が継承する場合もある。その平均が２３年である。したがって長男が生まれる年齢は２３才よりも早いであろう。２０才ぐらいで長男が生まれると仮定しよう。

神武天皇は２０才の時に多藝志美美命を生み、多藝志美美命が１０才のころに東征に出たとしよう。

	神武天皇	多藝志美美命
多藝志美美命の誕生	２０才	０才
東征への出発	３０才	１０才

次に神武天皇の死去時の年齢を考えてみよう。『記』『紀』は次のように書いている。

■凡そ神倭伊波禮毘古天皇の御年、壹佰参拾漆歳。　『記』
（訳）神武天皇の御年は百三十七歳。
■天皇、橿原宮に崩じぬ。時に年一百二十七歳。　『紀』

神武天皇の年齢は『記』では１３７才、『紀』は１２７才である。実際にはこのような長寿はあり得ない。これは二倍年暦であろう。古田武彦氏は『失われた九州王朝』（朝日新聞社）の中で次のように述べている。

①倭人は正歳四節を知らず。但春耕秋収を計って年紀と為す。　『魏略』
②倭人寿考、或いは八、九十、或いは百。　『魏志』倭人伝
①は春耕と秋収の二時点において、年紀（年の別れ目、正月）をもつ、という意味となる。倭人は一年に二回寿（とし）をとる、という意味だ。②の場合も、平均九十歳くらいとすればその半分の四十五歳位となる。

古田氏はこのように述べて、『記』『紀』の継体天皇以前は二倍年暦で書かれているとしている。

古田氏の考えに賛成である。二倍年暦であると考えると、神武天皇の死亡時の年齢は次のようになる。

	『記』	『紀』
記載年齢	１３７　才	１２７　才
実際の死亡年齢	６８.５才	６３.５才

神武天皇は大和へ来て、日子八井命・神八井耳命・神沼河命の３人を生んでいる（『記』）。『紀』では、「神八井命、神渟名川耳命を生む」とあり、２人である。（神渟名川耳命は『記』の神沼河命である。）

『紀』は、神渟名川耳命が「四十八歳に至り、神日本磐余彦天皇崩ず」と書いている。

東征にＸ年かかるとしよう。神武天皇は３０才のときに東征に出発し、大和に来て神渟名川耳命を生む。神渟名川耳命が４８才の時に死去しているので神武天皇の死去時の年齢は次のようになる。

・　３０＋Ｘ＋４８＝（７８＋Ｘ）才

東征には６－１０年はかかる（後述）。神武天皇の死去時の年齢は８０才を越える。死亡年齢は６３－６８才であるからそれを大きく上回る。神渟名川耳命が「４８才の時」とあるのも二倍年暦であろう。４８才の半分は２４才である。神渟名川耳命が２４才の時に神武天皇が死去したとすると次のようになる。

・　３０＋Ｘ＋２４＝（５４＋Ｘ）才

神武天皇が死去した年齢は（５４＋Ｘ）才となる。６３－６８才の中に収まる。「４８才」は二倍年暦である。それは神渟名川耳命が多藝志美美命を殺す場面からもいえる。『記』『紀』は次のように書いている。

■（兄の神八井耳命は）手足わななきて、得殺したまわざりき。　『記』
■神八井耳命、則ち手脚戦慄して矢を放つこと能（あた）わず。　『紀』

神八井耳命は手足がふるえて多藝志美美命（手研耳命）を殺すことができなかったとある。この事件は神武天皇が死去した後に起きている。神渟名川耳命は４８才以上になっている。

多藝志美美命は１０才で東征に出てＸ年かかっている。神武天皇は大和で神渟名川耳命を生み、神渟名川耳命が４８才のときに死去している。その後に神渟名川耳命が多藝志美美命を殺す。多藝志美美命が殺されたときの年齢は次のようになる。

・１０＋Ｘ＋４８＝（５８＋Ｘ）才以上

東征に６－１０年くらいかかるとすれば、多藝志美美命の年齢は６５才以上になる。６５才以上の老人を殺すのに恐くて手足がふるえて殺すことができないということはないであろう。

４８才を二倍年暦であるとすれば多藝志美美命の年齢は次のようになる。

・１０＋（６－１０）＋２４＝４０－４４才

４０才の壮年を殺すとなれば手足はふるえるであろう。「４８才」はやはり二倍年暦である。

(2) 東征の期間

次に東征の期間を検討しよう。『記』『紀』は次のように書いている。

■『記』の東征の期間

竺紫の岡田宮	１年
阿岐国多祁理宮	７年
吉備の高嶋宮	８年
□吉備までの合計	１６年

■『紀』の東征の期間

吉備国の高嶋宮　　3年

（東征終了時）「我東征より六年になる。」　6年

『記』は吉備までの期間しか書いていない。吉備から大和まではさらに数年はかかるであろう。和歌山県伊都郡に本陣を置いて長期間滞在している。

吉備から大和までの期間をＸ年とすると『記』による神武天皇の死去時の年齢は次のようになる。

出発時	３０才
東征の期間	１６＋Ｘ年
神渟名川耳命が２４才の時に死去	２４年
□神武天皇の年齢（合計）	（７０＋Ｘ）才

『記』『紀』の記す神武天皇の死去時の年齢は６３－６８才である。その年齢を越える。『記』の記す東征の期間も二倍年暦で書かれているのであろう。二倍年暦に修正すると次のようになる。

○神武天皇の死去時の年齢（二倍年暦に修正後）

出発時	３０才
東征の期間	（８＋Ｙ）年
神渟名川耳命が２４才の時に死去	２４年
□神武天皇の年齢（合計）	（６２＋Ｙ）才

Ｙが１－６年であれば神武天皇の死去時の年齢である６３－６８才になる。

『紀』の方には東征の期間は６年とある。『記』は（８＋Ｙ）年であり、８年以上である。『紀』の６年を越えている。『記』『紀』で東征の期間に差がある。この差は『記』『紀』の神武天皇の死亡時の年齢差ではないだろうか。その差は５年である。

６８.５才　－　６３.５才　＝　５　（年）

５年の差を東征の期間の差であると仮定すると、『紀』の方の東征の期間は６年であるから『記』の東征の期間は１１年となる。

（８＋Ｙ）－６　＝　５　（年）
Ｙ＝３
『記』の東征の期間　　８＋３＝１１年

『記』の東征の期間は吉備までが８年、その後さらに３年かかったことになる。このように仮定すると東征に出た時の神武天皇の年齢が判明する。

- 『記』…６８－（１１＋２４）＝３３才
- 『紀』…６３－（６＋２４）＝３３才

神武天皇は３３才の時に東征に出ている。その時の多藝志美美命の年齢は１３才くらいであろう。

神武天皇の一生は『記』『紀』で次のようになる。

	東征出発	東征の期間	神渟名川耳命誕生	死去
『記』	３３才	３３－４４才	４４才	６８才
『紀』	３３才	３３－３９才	３９才	６３才

東征の出発時期は２５５－２６５年ころである。その時の神武天皇の年齢は３３才であり、その３０－３５年後に死去している。神武天皇が死去した時の実年代は次のようになる。

（２５５－２６５年）＋（３０－３５年）　＝　２８５－３００年頃

神武天皇は２８５－３００年ころに死去している。

この年代は遺跡とも合う。神武天皇陵は桜井茶臼山古墳である。桜井茶臼山古墳は布留１式である。寺沢薫氏の編年表を見ると、布留１式は３００－３３０年頃である。神武天皇は２８５－３００年ころに死去し、古墳の造営に数年かかる。古墳ができるのは布留１式の時期である。

(3) 長髄彦の年齢

神武天皇の年齢が判明すると長髄彦の年齢が推定できる。『先代旧事本紀』によると宇摩志摩治命は長髄彦を殺して神武天皇に帰順している。宇摩志摩治命は神武天皇との戦いで情況をよく観察し、勝つ見込みがないと判断したので帰順したのであろう。伯父を殺してまで帰順するという決断は若い人にはできない。２０才代ではこのような判断はできないであろう。少なくとも宇摩志摩治命は３０－３５才以上になっていたと思われる。

長髄彦は宇摩志摩治命の母の兄である。宇摩志摩治命が生まれたとき長髄彦はすでに２５－３０才位にはなっていたであろう。神武東征は宇摩志摩治命が３０－３５才くらいの時であると仮定すれば長髄彦の年齢は次のようになる。

・（２５－３０）＋（３０－３５）＝５５－６５才位

神武東征の時の長髄彦の年齢は６０才前後である。この時の神武天皇の年齢は３９－４４才である。

宇摩志摩治命は３０－３５才以上であろうと思われるから神武天皇と宇摩志摩治命はほぼ同世代ということになる。長髄彦は一世代前の人である。

4　饒速日命と纒向王権

(1) 長髄彦と鳥見

長髄彦の本拠地は鳥見（とみ）である。『紀』は次のように書いている。

> 皇師遂に長髄彦を撃つ。連戦すれども勝つことあたわず。時に忽然として天陰げりて氷雨降る。乃ち金色の霊（あや）しき鵄（とび）有り。飛び来たりて皇弓の弭（はず）に止まれり。（中略）長髄彦の軍卒は皆迷い眩（くら）みて復（ま）た戦かわず。長髄は是邑の本の号なり。因りて人の名と為す。皇軍の鵄の瑞を得るに及んで時人鵄邑（とびむら）と号す。今、鳥見（とみ）と云うは訛りなり。（中略）
>
> 時に長髄彦、行人を遣わして天皇に言いて曰く、「嘗て天神の子有り。天の磐船に乗り、天より止（い）たれり。号して櫛玉饒速日命という。是吾が妹三炊屋媛（みかしきやひめ）（亦の名は長髄媛、亦の名は鳥見媛）を娶りて、遂に子有り。名を可美真手命（うましまでのみこと）という。　『紀』

長髄彦と戦っているところへ鵄（とび）が飛んで来て神武天皇の弓に止まった。その鵄が稲妻のように輝き目が眩み、戦うことができなくなった。そこでその地を鵄（とび）＝鳥見（とみ）というとある。

また饒速日命は長髄彦の妹の三炊屋媛を娶り、可美真手命（うましまでのみこと）を生むとあり、三炊屋媛は亦の名は鳥見媛というとある。長髄彦の妹の名は鳥見（とみ）である。

鵄（とび）や鳥見（とみ）は今の奈良県桜井市外山（とび）である。ここに鳥見山がある。

『記』も次のように書いている。

> 然る後、登美（とみ）毘古を将に撃たむとする時に歌に曰く（中略）故、邇芸速日命は登美毘古の妹登美夜毘売を娶り、生める子は宇摩志麻遅命（うましまじのみこと）。　『記』

邇芸速日命（饒速日命）は登美毘古の妹登美夜毘売を娶り、宇摩志麻遅命（可美真手命）を生んだとある。

長髄彦は登美毘古であり、妹の御炊屋姫（三炊屋媛）は登美夜毘売である。登美毘古・登美夜毘売の「登美（とみ）」は「鳥見（とみ）」である。登美毘古（長髄彦）は鳥見に居たから登美（鳥見）というのであろう。長髄彦の本拠地は桜井市外山である。

(2) 饒速日命と纒向遺跡のはじまり

寺沢薫氏は『古代学研究』９５号（古代学研究会）の「大和弥生社会の評価をめぐって」の中で次のように述べている。

- 大和の高地性集落は東南部に収斂する。
- 大和の銅鐸分布も東南部へ収斂する。

外縁付鈕式や扁平鈕式鐸が大和北部・西南部を中心とした全域に及ぶのに対して突線鈕式鐸４例が東南部に集中すること。纒向遺跡から突線鈕Ⅳ－Ｖ式鐸飾耳が破砕されて破片で出土している。

弥生時代の集落は次々と消滅していき高地性集落は東南部に収斂していく。また弥生時代の大和の祭器である銅鐸も大和の東南部に収斂していくという。大和の弥生集落の人々は追われて次第に東南部へ逃げてきている。

大和の東南部に鳥見がある。長髄彦の本拠地である。長髄彦は大和の弥生社会の最後の首長ではないだろうか。次第に追われて遂に東南部に住み着いたのであろう。

一方、饒速日命は朝鮮半島から渡来して、河内国の河上の哮峯（いかるがのみね）に上陸し、鳥見に遷ったとある。

饒速日尊は天神の御祖の詔（みことのり）を受けて、天の磐船に乗り、河内国の河上の哮峯（いかるがのみね）に天降る。則ち大倭国鳥見（とみ）の白庭山に遷り住む。（中略）饒速日尊は長髄彦の妹御炊屋姫（みかしきやひめ）を娶り、妃と為し、姙胎（はらま）しめたまう。　『先代旧事本紀』

饒速日命は河内から大和平野に入り、鳥見（桜井市外山）へ来ている。河内は大和平野の西北にある。そこから東南部へ来ている。大和の弥生集落が東南部に収斂していくことと一致する。饒速日命が大和の弥生集落の人々を東南部へ追いやったのであろう。寺沢薫氏は大和の弥生集落は５９のうち５０が消滅するという。饒速日命が滅ぼしたのではないだろうか。

東南部へ追いつめられた長髄彦は妹を饒速日命に差し出し、帰順したのであろう。『紀』に「吾（長髄彦）、饒速日命を以て君と為し、奉（つか）へまつる。」とある。

東南部の纒向地域には纒向遺跡が築かれる。纒向遺跡はそれまでの大和の弥生社会にはなかった新しい思想の都市型集落である。渡来人が築いた遺跡である。纒向遺跡は饒速日命が築いたのであろう。

(3) 饒速日命の渡来時期

纒向遺跡が築かれる直前に大和の弥生集落は消滅する。饒速日命が大和の弥生集落を討ち滅ぼしたからである。それには相当の年月を要したと思われる。神武東征は６－１１年かかっている。少なくとも１０年くらいはかかるであろう。

神武東征が終了するころの実年代は次のようになる。

- 神武東征の出発　２５５－２６５年
  東征の期間　６－１１年
- 東征の終了時期　２６１年－２７６年

饒速日命は河内に渡来して約１０年くらいかけて弥生集落を滅ぼしたとしよう。その後長髄彦の妹、三炊屋姫を娶って宇摩志摩治命を生む。宇摩志摩治命が３０－３５才くらいの時に神武天皇が東征にやって来たとする。饒速日命が渡来してきた時期は次のようになる。

- 饒速日命が渡来してから東征終了ころまでの期間
  １０＋（３０－３５）＝４０－４５年
- 饒速日命が渡来してきた時期
  （２６１－２７６年）－（４０－４５年）＝２１６－２３６年

饒速日命は２１６－２３６年ころに渡来してきたことになる。庄内０式期は２００－２２５年ころである。饒速日命が渡来してきたのは庄内０式期であるといえる。

纒向遺跡は庄内０式からはじまるという。饒速日命が大和へ入った時期とほぼ一致する。時期から見ても纒向遺跡は饒速日命が築いたのであろう。

「初期ヤマト王権」は纒向遺跡からはじまる。これを「纒向王権」と名付けよう。

第２章　神武天皇と磐余王権

1　神武天皇とその支配領域

(1) 神武天皇の本拠地

長髄彦の本拠地は鳥見（とみ）であり、今の桜井市外山（とび）である。神武天皇は長髄彦を伐ち、桜井市外山に住み着く。そこから各地を平定する。

> 諸将に命じて士卒を訓練する。この時、層富縣（そほのあがた）の波哆丘岬に新城戸畔（にいきとべ）という者有り。又、和珥（わに）の坂下に居勢祝（こせのはふり）という者有り。臍見（ほそみ）の長柄丘岬（ながらのおかさき）に猪祝（いのはふり）という者有り。この三処の土蜘蛛は並びにその勇力を恃（たの）みとして庭（朝廷）に来ようとしない。天皇は偏師（かたいくさ＝一部の軍）を分けて遣わし皆これを誅す。
>
> 又、高尾張邑に土蜘蛛有り。その人となりは身短く、手足長し。侏儒と相類（に）たり。皇軍、葛の網を結い、襲い殺す。因りて改めて其の邑を号して葛城という。それ磐余の地の旧名は片居。亦は片立という。
>
> 我が皇師の虜（あた）を破るに逮（いた）りて大軍集い、其の地に満つ。因りて改めて号して磐余となす。
>
> 或いは曰う、天皇、軍を出して西を征（う）つ。この時、磯城の八十梟帥、彼処に屯聚（いわ）み居す。果たして天皇と大いに戦う。遂に皇師のために滅ぼされる。故、これを名つけて磐余邑という。
>
> 『紀』

神武天皇は鳥見に居て、偏師（一部の軍）を派遣して周辺の地域を平定している。さらに磯城の八十梟帥を滅ぼす。そこは磐余という。

神武天皇の名前は神日本磐余彦である。磐余に居たから磐余彦と呼ばれている。神武天皇は鳥見、および磐余に住んでいる。どちらも鳥見山（畝傍山）の北、あるいは北西にある。同じ地域である。神武天皇の本拠地は磐余（鳥見）である。

(2) 神武天皇の支配領域

神武天皇は磐余の本拠地から軍を派遣して「層富縣」、「和珥」、「臍見」、「高尾張邑（葛城）」の地域を平定している。

『和名抄』の大和国に「添上（曽布之加美＝そふのかみ）、添下（曽布之之毛＝そふのしも）」があり、層富（そふ）は「添（そふ）」であろうといわれている。添上郡には春日があり、添下郡には佐紀がある。大和平野の北側一帯である。

和珥（わに）は今の天理市和珥であろうといわれている。大和平野の東側である。神武天皇の本拠地（鳥見・磐余）のすぐ北にある。

臍見は不詳である。葛城は今の御所市の西南部であろうといわれている。

- 層富縣……大和国添上・添下郡。春日、佐紀付近
- 和珥　……大和国添上郡の地名。今の天理市和珥
- 臍見　……不詳
- 高尾張邑……葛城（今、御所市西南部）

神武天皇はこれらの地域を平定している。磐余から天理市（和珥）、奈良（春日）という笠置山地の麓に沿った地域を平定している。

葛城も大和平野の南の山に沿った地域である。神武天皇は磐余から山に沿った地域を平定している。神武天皇が支配した領域は次のようになる。

図 31　神武天皇の支配領域

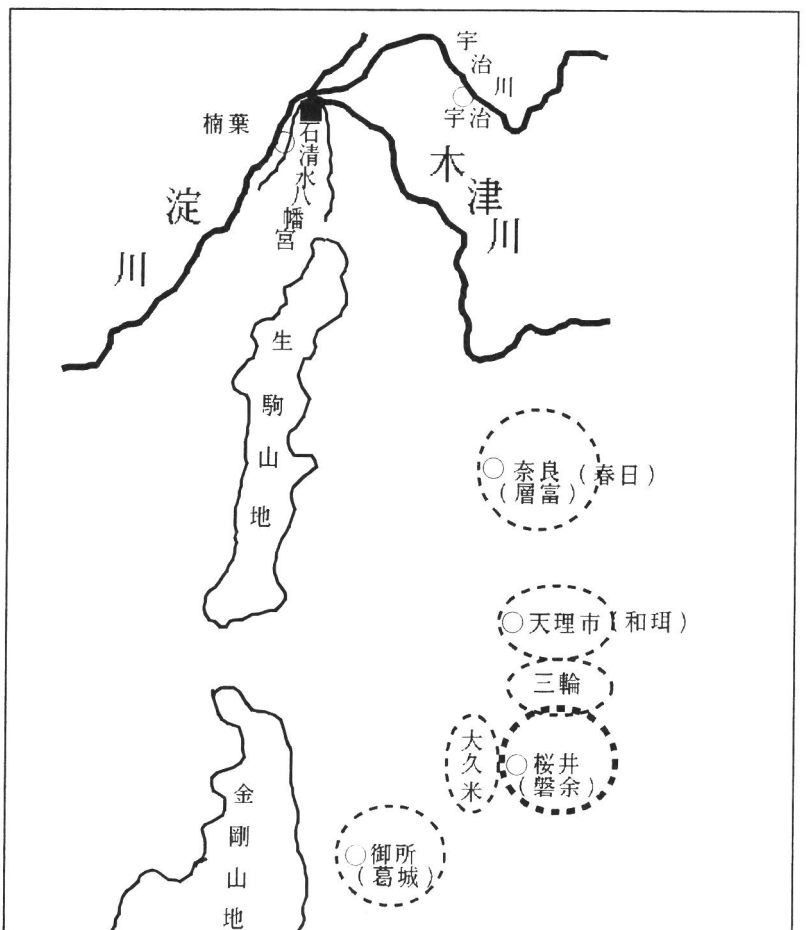


図 31　神武天皇の支配領域

2　神武天皇と纒向遺跡

(1) 纒向遺跡の衰退と神武天皇

纒向遺跡のピークは3世紀の第4四半期に入るころであるという。２７５年ころがピークである。その後は次第に衰退していく。

神武天皇が大和へ入ったのは２６１－２７６年ころである。丁度、纒向遺跡がピークの時である。

この時の纒向王権の王（首長）は宇摩志摩治命である。纒向遺跡の創始者である饒速日命はすでに死去している。

宇摩志摩治命は伯父の長髄彦を殺して神武天皇に帰順している。纒向勢力は神武天皇の支配下に入る。

纒向遺跡が衰退するのは神武天皇に支配されるようになるからであろう。

(2) 纒向遺跡の終焉と桜井茶臼山古墳

纒向遺跡は庄内２式－３式期に石塚古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳、勝山古墳が築かれ、布留０式期に箸墓古墳が築かれる。それ以降は古墳は築かれない。布留０式期をピークに纒向勢力は衰退する。

一方、次の布留１式期になると忽然として磐余の地（畝傍山＝鳥見山）に桜井茶臼山古墳が築かれる。神武天皇の陵である。纒向地域の衰退と入れ替わりに磐余に大きな古墳が築かれる。神武天皇が纒向勢力を倒し、王権を樹立したからである。

『記』『紀』や『先代旧事本紀』は「神武東征」について記述しており、その中で纒向勢力である饒速日命や長髄彦や宇摩志摩治命が神武天皇に帰順したと書いている。それが史実であることを遺跡が証明している。

纒向勢力は「初期ヤマト王権」のはじまりである。これを「初期ヤマト王権の第１期（纒向王権）」と呼ぶことにする。

それを倒して大和平野を支配するようになった神武天皇の勢力を「初期ヤマト王権の第２期（磐余王権）」と呼ぶことにしよう。

第３章　綏靖天皇と三輪王権

1　神渟名川耳命と多藝志美美命

(1) 伊須気余理比売と三輪勢力

神武天皇は日向（伊都国）にいる時、小椅君の妹、阿比良比売を娶り、多芸志美美命、岐須美美命を生んでいる。多芸志美美命は神武天皇とともに東征に出る。神武東征は移住であり、逃亡であるから大和に住み着くと神武天皇はすぐに新しい后を求める。

> 然るにさらに大后と為す美人を求める時、大久米命曰く、「此間に媛女有り。是、神の御子という。その神の御子と謂う所以（ゆえん）は三嶋湟咋（みしまみぞくい）の女、名は勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）、其の容姿は麗美。故、美和の大物主神、見て感じ、其の美人が大便をする時、丹塗りの矢に化けて、大便の流れる溝を流れ下り、その美人の富登（ほと＝陰部）を突く。ここに其の美人は驚き、立ち走り、伊須須岐伎（いすすきき）。乃ち其の矢をもち来て床の辺に置くと、忽ち麗しき壮夫（おとこ）となり、即ち其の美人を娶り、子を生む。名を富登多多良伊須須岐比売命（ほとたたらいすすきひめ）という。亦の名は比売多多良伊須気余理比売（ひめたたらいすきよりひめ）という。故、是を以て神の御子というなり。」という。　『記』

神武天皇は伊須気余理比売を后にむかえる。伊須気余理比売の父は美和の大物主大神である。美和は三輪であり、三輪山の神である。

伊須気余理比売の家は狭井河の上にある。

伊須気余理比売命の家は狭井河の上に在り。　　『記』

狭井河は三輪山から流れる川である。伊須気余理比売は三輪の人である。三輪勢力の娘が神武天皇の后になっている。

神武天皇は三輪よりも北の天理市和珥や奈良（春日）まで平定している。当然手前の三輪地域は神武天皇の支配下に入っているであろう。

(2) 多藝志美美命の陰謀

神武天皇と伊須気余理比売との間に３人（『紀』では２人）の子供が生まれる。

然して生まれた御子は日子八井命、次に神八井耳命、次に神沼河耳命の三柱なり。　　『記』

神武天皇が死去すると、日向（伊都国）で生まれた當芸志美美命（多藝志美美命＝たぎしみみ）は大和で生まれた子供を殺そうとたくらむ。

故、天皇崩じて後、その庶兄の當芸志美美命はその嫡后（おおきさき）の伊須気余理比売を娶ろうとする時、将にその三人の弟を殺そうとする間に、その御祖（みおや）伊須気余理比売は患（うれ）い苦しみ、而して歌を以てその御子等に知らしめす。

・狭井河よ　雲立ちわたり　畝火山　木の葉騒ぎぬ　風吹かむとす

・畝火山　昼は雲とい　夕されば　風吹かむとぞ　木の葉騒げる

是に其の御子は聞き知り、驚きて乃ち當芸志美美命を殺そうとするとき、神沼河耳命は兄の神八井耳命に曰く、「汝命、兵（器）を持って入り、當芸志美美を殺せ。」という。故、兵（器）を持って入

り、殺そうとするとき、手足わななきて殺すことを得ず。故、ここに其の弟神沼河耳命、其の兄の持っている兵を乞い、入り、當芸志美美を殺す。故、亦其の御名を称して建沼河耳命と謂う。　『記』

多藝志美美命は弟達を殺そうとたくらむ。伊須気余理比売は歌でそれを我が子に知らせる。そのため逆に多藝志美美命は弟達に殺される。

2　真の第２代天皇

(1) 手研耳命（多藝志美美命）陰謀説への疑問

『紀』は、神渟名川耳命（神沼河耳命）が多藝志美美命（手研耳命＝たぎしみみ）を襲う場面を次のように書いている。

神日本磐余彦天皇崩ず。（中略）神渟名川耳尊は特に喪葬の事に心を留めたまえり。その庶兄手研耳命は行年すでに長じて久しく朝機（まつりごと）を歴（へ）たり。故、亦事を委（ゆだ）ねて之に親しむ。然るに其の王は立ちて厝を操ることを懐く。本より仁義に乖（そむ）けり。遂に諒闇（喪に服する期間）の際を以て威福自由（欲しいままにすること）。禍の心を包み蔵（かく）して二人の弟を害することを図る。

神渟名川耳尊は兄の神八井耳命と陰（ひそか）に其の志を知り、善く之を防ぐ。山陵の事が畢（おわ）るに至り、乃ち弓部の稚彦に弓を造らせ、倭鍛部の天津真浦に真かごの鏃を造らせ、矢部に箭を作らせる。弓矢既に成るに及び、神渟名川耳尊は手研耳命を射殺さん

と欲す。たまたま手研耳命は片丘の大室の中に有り。独り大牀（おお床）に臥す。時に淳名川耳尊、神八井耳命に謂いて曰く、「今たまたまその時なり。（中略）爾（なんじ）、其れ射よ。」という。（中略）神八井耳命、手足戦慄して矢を放つことあたわず。時に神淳名川耳尊、其の兄の所持する弓矢を取り、手研耳命を射る。一発で胸に中る。　『紀』

手研耳命（多藝志美美命）は「二人の弟を害することを図る」とある。弟を殺そうと企んでいる。

ところが神淳名川耳尊の方が十分な時間をかけて弓矢を作っている。「乃ち弓部の稚彦に弓を造らせ、倭鍛部の天津真浦に真かごの鏃を造らせ、矢部に箭を作らせる。」とある。

しかも弓矢ができあがると神淳名川耳命が手研耳命を殺そうと狙っている。「弓矢既に成るに及び、神淳名川耳尊は手研耳命を射殺さんと欲す。」とある。

そしてついにチャンスが来る。神淳名川耳命は手研耳命が独りで休んでいるところを襲う。「たまたま手研耳命は片丘の大室の中に有り。独り大牀（おお床）に臥す。」とある。神淳名川耳命の方が手研耳命を襲っている。

『記』『紀』は、神淳名川耳命が兄と二人で手研耳命を襲ったと書いている。しかし二人で襲うのであれば改めて弓矢を作る必要はない。手持ちの弓矢で十分であろう。弓矢を作らせているのは多くの弓矢が必要だからである。神淳名川耳命は大勢の兵を率いて手研耳命を襲ったのではないだろうか。

神淳名川耳命は十分な準備をし、手研耳命を殺す機会を狙っている。しかも大勢の人数で手研耳命を襲っている。『記』『紀』は、手研耳命の方が二人の弟を殺そうとたくらんでいたと書いているが、史実は逆なのではないだろうか。

(2) 手研耳命の即位

第２代天皇は綏靖天皇（神渟名川耳命）である。手研耳命（多藝志美美命）を殺して即位している。

しかし実際には手研耳命が先に即位していたと思われる。前述の『紀』には、「其王立つ」とある。原文は次のようになっている。

> 然其王立操厝懐、本乖仁義。　　『紀』

この文章は訳が難しい。岩波書店の日本古典文学大系『日本書紀』や岩波文庫の黒坂勝美編『日本書紀』では次のように訳している。

> 然かれども其の王、立操厝懐（ココロバヘココロオキテ）、本より仁義に乖（そむ）けり。

頭注に「立操厝懐」についての解説がある。

> 立は、もと、大地に人の立つ形に象る。安定している意。また、かまえて置く意。操は、集韻に「持念也」とある。こころをさだめる意。古訓ココロハヘにあたる。

このように解説している。しかしこれは納得がいかない。『日本書紀』は漢文で書かれている。漢文として読むべきであろう。「其王」の次には動詞が来るはずである。「其王立（其の王立つ）」となるのではないだろうか。

> 然るに其の王は立ち、厝を操ることを懐く。本より仁義に乖けり。

「其の王は即位して、厝を操ることを懐く」という意味である。其の王、すなわち手研耳命は即位している。

この文章の前に次の文がある。

> 其庶兄手研耳命、行年已長、久歴朝機。故、亦委事而親之。　『紀』
> （訳）其の庶兄の手研耳命は行年已に長じて、久しく朝機（みかどまつりごと）を歴（へ）たり。故、亦事を委ね而して之に親しむ。

庶兄の手研耳命は年はすでに長じており、長く朝廷の仕事（天皇が行う政）をしてきたとある。手研耳命は長い間神武天皇の手伝いをしている。即位するのは手研耳命の方であろう。

当時（神武天皇が死去したとき）の二人の年齢を比べればそれがよくわかる。

○神武天皇が死去したときの二人の年齢

- ■神武天皇の年齢　　６３才、または６８才
- ■手研耳命　　４３才、または４８才
- ■神渟名川耳命　　２４才

手研耳命は４３才－４８才である。『紀』にあるように「行年已に長じ」ている。神武天皇は６０才を過ぎている。すでに年老いている。手研耳命が神武天皇に替わって「久しく朝機（みかどまつりごと）を歴（へ）たり」とあるのは当然であろう。手研耳命は天皇の代理をしている。

一方の神渟名川耳命は２４才である。まだ若輩である。４３才以上になっている多藝志美美命とは親子ほどの年齢差がある。手研耳命が即位するのは当然であろう。

「操厝（厝を操る）」ことは「本乖仁義（本より仁義に乖（そむ）けり」とある。「操厝」は仁義に背くことである。ところが「厝」は「砥石（といし）」

である。砥石にそのような意味はない。「厝」の字はあるいは写し間違えの文字かもしれない。

「砥石」として考えられるのは『淮南子』の次の文章であろう。

■剣待砥、而後能利。　『淮南子』
（訳）剣は砥石で研ぐことにより、よく切れるようになる。

「砥石を操る」とは、「兵力を操る」という意味になるであろう。武力によって天下を操ろうとしたという意味ではないだろうか。

手研耳命は神武天皇の長男であり、東征の時から神武天皇と行動をともにしている。年齢も４０才を越えている。しかも神武天皇の代理を長くしてきている。手研耳命が神武天皇の後を継ぐのは当然であろう。

神渟名川耳尊はその王（天皇＝手研耳命）を襲って殺し、自分が即位している。これは反逆である。

『記』『紀』はそれを隠すために、手研耳命が神渟名川耳尊等を殺そうと企んでいたと書いているのであろう。『記』『紀』は神渟名川耳尊を第２代天皇にしている。反逆したことを記録から除かねばならない。そのため手研耳命を悪者に仕立て、神渟名川耳命の即位を正当化したのであろう。

しかし完全には隠すことができなかった。『紀』に史実が漏れて記載されている。それが「其の王（手研耳命）立つ」である。手研耳命は即位している。真の第２代天皇は手研耳命（多藝志美美命）である。

3　綏靖天皇と纒向勢力

(1) 綏靖天皇の本拠地

手研耳命は即位している。神武天皇の後を継ぎ、磐余を本拠地にしていたのであろう。

神渟名川耳命は天皇である手研耳命を殺した。磐余には手研耳命の勢力が多くいるであろう。磐余に住むのは危険である。神渟名川耳尊（綏靖天皇）の母は三輪の人である。綏靖天皇は三輪の人々の協力を得て手研耳命を伐っている。綏靖天皇は三輪を本拠地にしたと思われる。

綏靖天皇は手研耳命を伐ち、手研耳命が受け継いだ領域を手に入れている。綏靖天皇は三輪を本拠地として、大和平野の東側と南側を支配した。これを「三輪王権」と名付ける。「初期ヤマト王権の第３期　（三輪王権）」である。

図 32　綏靖天皇の本拠地と領域

(2) 綏靖天皇と纒向勢力

綏靖天皇（神沼河耳命）は師木縣主（しきのあがたぬし）の祖、河俣毘売を后にしている。

> 神沼河耳命、葛城の高岡宮に座して天下を治す。この天皇、師木縣主（しきのあがたぬし）の祖、河俣毘売（かわまたひめ）を娶りて生みませる御子、師木津日子玉手見命。　『記』

師木は磯城である。『新撰姓氏録』大和国神別に、佐為連と志貴連（しきのむらじ）について次のように書いている。

■佐為連…石上朝臣と同じ祖。神饒速日命の十世の孫、伊己止足尼の後なり。
■志貴連…同じ神の孫、日子湯支命の後なり。

『新撰姓氏録』大和国神別

志貴連は磯城（師木）連である。「志貴連」の説明に「同じ神」とあるのは佐為連と同じ神という意味であり、饒速日命をいう。志貴連（磯城連）は饒速日命の孫の日子湯支命（ひこゆきのみこと）の後であるという。磯城縣主は饒速日命の孫から出ている。

饒速日命は纒向遺跡の創始者である。磯城（師木）縣主は饒速日命の孫から出ているから磯城縣主は纒向の勢力である。綏靖天皇は纒向勢力の娘を后にしている。

綏靖天皇の母は三輪の人である。三輪の隣りに纒向がある。綏靖天皇は手研耳命を襲い、即位すると纒向勢力の娘を后にしている。綏靖天皇が手研耳命を撃った背後には纒向勢力があったのであろう。

纒向勢力は神武天皇に伐たれてその支配下に入っている。その巻き返しを窺っていたのであろう。丁度その時、神武天皇が死んだ。絶好の機会である。纒向勢力は神武天皇の后である伊須気余理姫を利用して子の神渟名川耳命に手研耳命を撃たせたのではないだろうか。『記』『紀』には、綏靖天皇は兄と二人で手研耳命を撃ったと書いているが、十分な時間をかけて弓や矢を造っている。二人で襲うのであれば弓矢は既存のもので十分である。弓矢を十分な時間をかけて作っているのは大勢で襲撃するからであろう。おそらく三輪勢力の背後には纒向勢力があり、手研耳命を襲撃させたのではないだろうか。そのため即位すると纒向勢力の娘を后に迎えている。神渟名川耳命（綏靖天皇）の反逆は神武天皇の勢力の弱体化を狙った纒向勢力の反撃だったのではないだろうか。

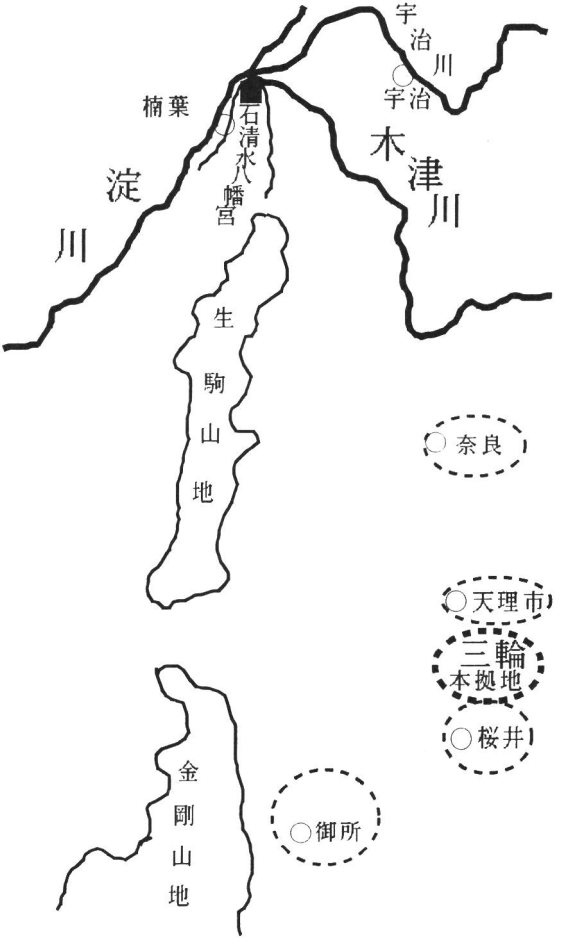


図 32　綏靖天皇の本拠地と領域

第４章　崇神天皇と初期ヤマト王権

1　崇神勢力の南下

(1) 崇神天皇と三輪山

崇神天皇の本拠地は山城の椿井である。ところが三輪地域まで支配している。疫病が流行したとき崇神天皇は大田田根子を探して御諸山（三輪山）で大物主大神を祭らせている。

■意富多多泥古命（おおたたねこのみこと）を以て神主と為し、御諸山に意富美和（おおみわ）の大神の前を拝し祭らせたまう。　『記』
■大田田根子を以て大物主大神を祭る主と為す。（中略）所謂（いわゆる）大田田根子は今の三輪君等の始祖なり。　『紀』

崇神天皇は大田田根子に御諸山の大物主大神を祭らせている。御諸山は三輪山である。三輪山は崇神天皇の支配下にある。

三輪山は綏靖天皇の本拠地である。そこが渡来人である崇神天皇の領域になっている。しかも崇神天皇が探し求めた大田田根子は三輪に住み着き、三輪君等の祖になっている。三輪山は崇神天皇に侵略されている。

綏靖天皇（神渟名川耳尊）は「葛城に都す」とある。

■元年、神渟名川耳尊、天皇の位に即く。葛城に都す。是を高丘宮という。『紀』
■神沼河耳命、葛城の高岡宮に座して天下を治すなり。　『記』

綏靖天皇の本拠地は三輪である。「葛城に都す」とあり、綏靖天皇は葛城で天下を治めている。三輪山は崇神天皇に奪われたので綏靖天皇は三輪から葛城

へ逃げたのであろう。崇神天皇は椿井から南下して大和へ侵入し、三輪勢力を追い出している。

(2) 崇神天皇と大和

崇神天皇は宇陀地方も支配している。

> 又宇陀の墨坂神に赤色の楯矛を祭り、又大阪神に墨色の楯矛を祭る。　『記』

崇神天皇は宇陀の墨坂に楯・矛を祭るとある。宇陀は神武東征のルートであり、綏靖天皇が支配していたはずである。ところがそこも崇神天皇の領域になっている。

岩波書店の『日本書紀』の頭注には「墨坂は奈良県宇陀郡榛原町西方の坂で、大和中央部と伊勢を結ぶ要路上にある。」とある。崇神天皇は伊勢へ出る道を押さえている。

崇神天皇の軍は北の山城から攻めて来て、三輪の綏靖天皇を追い出し、宇陀まで侵略している。

「又大阪神に墨色の楯矛を祭る。」とある。大阪も崇神天皇に占領されている。大阪は岩波書店の『日本書紀』の頭注に「『和名抄』に大和国葛上郡大阪郷がある。今の奈良県北葛城郡香芝町逢坂付近」とある。大阪は大和から難波へ出る要路である。崇神天皇は大和から難波へ出る道も押さえている。崇神天皇は大和平野のほぼ全域を手中にしているといえる。

2　綏靖王権の衰退

(1) 綏靖天皇と崇神天皇の実年代

綏靖天皇は第２代天皇である。崇神天皇は第１０代天皇である。８代の開きがある。ところが二人は同時代の人である。

崇神天皇の崩年は３１８年である。死去したときの年齢は『記』『紀』に次のように書いている。

■天皇御歳、壹百陸拾捌歳。　『記』
（訳）天皇の御歳、１６８歳。
■時に、年百廿歳。　『紀』
（訳）時に、年１２０歳。

これらは二倍年暦であろう。崇神天皇の死去時の年齢は８４才、あるいは６０才となる。８４才という長寿はあり得ないであろう。崇神天皇は２８５年に伽葉原夫餘から逃げてきている。崇神天皇が３１８年に８４才で死去したとすれば２８５年の時点では５１才である。崇神天皇の父（依羅）は７５才以上になる。このような高齢では王として鮮卑と戦うことはできないであろう。『記』の１６８才は何かの間違いであろうと思われる。

崇神天皇は３１８年に６０才で死去したとすると、２８５年の時点では２７才である。父は約５０才くらいになる。これは可能性としてもっとも高い。崇神天皇の死去時の年齢は『紀』の６０才であろう。

綏靖天皇は神武天皇が死去したとき２４才である。その時期は２８５－３００年頃である。

綏靖天皇の死去時の年齢は『記』『紀』に次のように書いている。

■天皇の御年、肆拾伍歳。　『記』

（訳）天皇の御年は４５歳。

■天皇不豫。崩ず。時に年八十四。　『紀』

綏靖天皇は『記』では４５才、『紀』では８４才とある。『記』の４５才は二倍年暦ではないと思われる。二倍年暦であるとすれば死去したのは４５才の半分、約２３才となる。ところが神武天皇が死去したとき綏靖天皇はすでに２４才である。その後即位して天下を治めているので２３才の死去はあり得ない。

『紀』の８４才は二倍年暦であろう。８４才の半分は４２才である。『記』の４５才に近い。綏靖天皇は４２－４５才ころに死去したと思われる。

その時期は３０３－３２１年頃であろう。神武天皇が（２８５－３００）年ころに死去したとき綏靖天皇は２４才である。

・（４２－４５才）－２４才＝　１８－２１年

・（２８５－３００年）＋（１８－２１年）　＝　３０３－３２１年

綏靖天皇は３０３－３２１年ころに４２－４５才で死去している。崇神天皇は３１８年に６０才で死去している。

■綏靖天皇

神武の死亡時	２４才	２８５－３００年
死去	４２－４５才	３０３－３２１年

■崇神天皇

即位	２７才	２８５年
死去	６０才	３１８年

綏靖天皇と崇神天皇はほぼ同時代の人である。第２代天皇と第１０代天皇が同時代ということになる。崇神天皇が綏靖天皇を三輪から追い出したという推察も同時代の人であるから可能性は高い。

(2) 崇神天皇と神八井耳命

神八井耳命は多芸志美美命（手研耳命）を撃つときに手足が震えて殺すことができなかった。神八井耳命はそれを恥じて次のように述べて位を弟に譲る。

> ここに神八井耳命は弟の建沼河耳命に譲りて曰く、「吾は仇を殺すことができなかった。汝命はすでに仇を殺すことを得たり。故、吾は兄なれども上（天皇）に為るべからず。是を以て汝命は上と為り、天下を治めよ。僕は汝命を扶（たす）けて、忌人（いわいひと）となりて仕え奉る。」という。
> 神八井耳命は意富臣、小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫三家連、雀部臣、雀部造、小長谷造、都祁直、伊余国造、科野国造、道奥石城国造、常道仲国造、長狭国造、伊勢船木直、尾張丹羽臣、嶋田臣等の祖なり。　『記』

神八井耳命の子孫は多い。四国や九州、尾張、科野（しなの）等にいる。ところが神八井耳命は大和で死去している。

> （綏靖）四年、神八井耳命薨（かみさ）りましぬ。即ち畝傍山の北に葬す。　『紀』

神八井耳命は畝傍山（鳥見山）の北に埋葬されている。神八井耳命は磐余に住んでいたのであろう。鳥見山の北には神武天皇陵（桜井茶臼山古墳）がある。その近くに埋葬されたと思われる。

綏靖天皇は「元年に、葛城に都す。」とある。元年に葛城へ逃げている。神八井耳命は四年に磐余で死去している。神八井耳命を「畝傍山の北に葬す。」とあるが桜井茶臼山古墳のそばに前期古墳はない。神八井耳命は崇神天皇に殺されたのではないだろうか。そのため古墳は造ってもらえなかったのであろう。このとき宇陀の地（墨坂）まで奪われたと思われる。

神八井耳命の子供達は各地へ逃げた。神八井耳命の子孫が全国に多いのはそのためであろう。特に九州に神八井耳命を祖とする伝承が多いのは神八井耳命の父が神武天皇だからであろう。神八井耳命の子供達は神武天皇の故郷である九州へ安住の地を求めて逃げたのではないだろうか。

3　最初の統一王朝

(1) 四道将軍の派遣

崇神天皇は各地へ将軍を派遣する。

- 此の御世に大毘古命を高志道に遣わし、其の子の建沼河別命を東方の十二道に遣わし、そのまつろわぬ人等を和平させたまう。又日子座王を旦波国へ遣わし玖賀耳の御笠を殺さしめたまいき。　『記』
- 大彦命を以て北陸へ遣わす。建淳川別を東海に遣わす。吉備津彦を西道に遣わす。丹波道主命を丹波に遣わす。　『紀』

崇神天皇は各地を平定するために四道将軍を派遣している。『記』は高志（越＝北陸）、東方十二道（東海）、丹波とあり、南と西（吉備）がない。

『紀』は、北陸・東海・吉備・丹波を「四道」としているが南がない。南がないのはすでに平定しているからであろう。崇神天皇は綏靖天皇を三輪から追い出し、神八井耳命を伐ち、墨坂には赤盾８枚・赤矛８竿を祭り、大阪には黒盾８枚・黒矛８竿を祭っている。大和平野はほぼ平定している。そのため「四道将軍の派遣」に南がないのであろう。

崇神天皇は北陸、丹波、東海へ将軍を派遣している。この時の将軍のものと思われる冑が出土している。椿井大塚山古墳や豊前の石塚山古墳から出土した小札革綴冑と同じものが滋賀県雪野山古墳・京都府瓦谷古墳・京都府向日市妙見山古墳・三重県上野市石山古墳等から出土している。北陸・丹波・東海へ派遣された「四道将軍」の墓ではないだろうか。小札革綴冑はこれらの将軍が中国から持ってきたものであろう。

(2) 吉備津彦と備前（湯迫）車塚古墳

『紀』には「吉備津彦を西道に遣わす。」とある。吉備（岡山市）に備前車塚古墳がある。湯迫（ゆば）車塚古墳ともいう。『探訪　日本の古墳　西日本編』（有斐閣選書Ｒ）は備前車塚古墳について概略次のように書いている。

□備前車塚古墳（湯迫車塚古墳）

○古墳の位置

■東岡山駅の北方にある瀧ノ口山の南麓の尾根上につくられた前方後方墳である。

○墳形と規模

■全長４８.３ｍ、後方部の後辺２４.５ｍ、前辺２３ｍ、側辺２６.５ｍ前方部の長さ２１.８ｍ、くびれ部幅１０.５ｍ

■前方部の前端は三味線の撥（バチ）のように開いている。

■墳丘には葺石がある。裾部には列石あるいは石垣ともいうべき状態で、上下二段に積まれて墳丘裾部を一周している。

■埴輪などの痕跡は全くみとめられなかった。

○石室……竪穴式石室

■長さ約５．９ｍ、幅約１．３－１．２ｍ、高さ約１．５ｍ

■割石を持ち送りに積んでいる。天井は八枚の蓋石でおおわれている。

■石室の床面には、厚さ約１５ｃｍの粘土床が敷かれ、中央に木棺が安置されたらしく粘土床の中央はゆるい凹面を呈している。

■粘土床と側壁との間には小角礫が填入されていて、側壁から侵入する水分を排する配慮とも受け取れる。

○副葬品

■盗掘によって副葬品は私蔵されていた。発掘者からの聞き書きによれば配列は次のようである。

「副葬品は石室の北部に、剣は東西の位置に、刀は南北の位置に置かれ、その他の鉄製品（鉄矛を除く）は南部に一括されていたようである。一三面の鏡は方形に、室の中央にめぐらされ、北に三面、南に三面、東に四面、西に三面があったとのことで、南の三面と北中央の一面を除いて、他は鏡が何かにもたせかけた状態だったようで、東・西に各四個ずつの石が、鏡と石室の間に存在していた。（後略）」

■鏡１３面中、１１面が三角縁神獣鏡である。

■鉄剣１、鉄刀１、鉄矛１、鉄鏃７、短冊形鉄斧１、斧形鉄製品１などがある。

■１９６７年、１９６８年の調査で、さらに鉄鏃、鉄斧、鉄剣、鉄刀、鉄棒（矛）残片、ヤリガンナ、靭（ゆき）などが検出された。

○備前における古墳の成立

■前方後円墳や前方後方墳のような、定型化した古墳が出現するのは、おそらく岡山地方ではこの備前車塚古墳が最初の姿ではないだろうか。女男岩（めおといわ）墳墓・楯築墳墓・都月坂墳墓とは異なった墳墓のス

タイルを具現化した点、あらたに三角縁神獣鏡を副葬品として保有する点など、それ以前にみられなかったいくつかの新しい要素は、地域集団の成長というだけでは説明がつかない現象で、日本列島内のとくに西日本一帯を含めて胎動してきた政治的な流れの中に位置づけられるものである。

○石室への埋葬とその儀礼

■弥生時代後期の岡山地方では、特殊器台形土器が墳墓に埋置されていた。備前車塚古墳では、特殊器台形土器がみられず、石室上面に破砕された土器片が埋置されていた。こうした現象は各地の初期古墳と共通する特徴である。ここにも死者に対する葬送儀礼の大きなちがいをみることができる。死者を安置するための施設にも、従来の木棺直葬の方法から木棺を石室で完全に覆うという方法に変化している。この変化は死者のもつ死後の空間をも拡大することであり、同時に多くの副葬品によって死者を守護するいみあいもあっただろう。長さ６ｍ、深さ１.５ｍもの石室は、新たな葬送儀礼の出発点でもある。

○副葬品の諸問題

■１３面もの鏡の副葬は、瀬戸内沿岸地方では希有な例である。内行花文鏡・画文帯神獣鏡の各１面と１１面の三角縁神獣鏡である。

■画文帯神獣鏡は弥生時代遺跡の出土例がない。初期古墳の副葬鏡として京都府椿井大塚山古墳をはじめ、兵庫県求女塚古墳・兵庫県ヘボソ塚古墳・奈良県新山古墳・大阪府黄金塚古墳などにみとめられ、三角縁神獣鏡とともに古墳時代初期の銅鏡として注目されるものである。

■さらに注目すべきことは、備前車塚古墳にある１１面の三角縁神獣鏡には、８種９面の同笵鏡があって、それらが他の古墳の副葬鏡との間に同笵関係をもつことである。

■同笵鏡を保有し合うという関係は服属あるいは従属関係があったのではないかという推定もできる。とくに初期古墳の成立する段階での同笵鏡の分布は、当時の政治的胎動を物語るものとして注目しなければなら

ない。（中略）備前車塚古墳の被葬者は畿内地方から九州・東日本にまで関係をもちうるほどの地位にあったことも推定されるし、当然、瀬戸内海という海上交通の要所を掌握していたものと考えられる。

備前車塚古墳からは１３面もの鏡が出土している。その中の１１面が三角縁神獣鏡である。崇神天皇陵である椿井大塚山古墳からは３０数面もの三角縁神獣鏡が出土している。三角縁神獣鏡をこのように多量に副葬しているのは椿井大塚山古墳と深い関係があるからではないだろうか。椿井大塚山古墳の鏡と同笵鏡もある。崇神天皇が派遣した吉備津彦の墓ではないだろうか。

椿井大塚山古墳との関係は鏡の置き方にもみられる。備前車塚古墳では死体を鏡が取り囲んでいる。１３面の鏡は、「北に三面、南に三面、東に四面、西に三面があり、南の三面と北中央の一面を除いて、他は鏡が何かにもたせかけた状態だったようであり、東・西に各四個ずつの石が、鏡と石室の間に存在していた。」という。

椿井大塚山古墳の鏡の置き方についても『探訪　日本の古墳（西日本編）』（有斐閣選書Ｒ）は次のように書いている。

三十数面の鏡は石室の周壁に沿って置かれていたらしく、原位置にのこっていた二面は紐のある背面を内向きにして石壁にたてかけてあった。

椿井大塚山古墳の鏡も死体を囲むように置かれている。備前車塚古墳も同じ思想で副葬している。やはり崇神天皇が派遣した吉備津彦の墓であろう。

(3) 豊木入日子命と石塚山古墳

崇神天皇の子に豊木入日子命がいる。

■この天皇、木国造、名は荒河刀辨（あらかわとべ）の女、遠津年魚目目微比売（とおつあゆめまくわしひめ）を娶りて生みませる御子、豊木入日子命。次に豊鉏入日売命（とよすきいりひめ）。又尾張連の祖、意富阿麻比売を娶りて生みませる御子、大入杵命。次に八坂之入日子命。次に沼名木之入日売。次に十市之入日売。

また大毘古命の女、御真津比売命を娶りて生みませる御子、伊玖米入日子伊沙知命（いくめいりひこいさち）。（中略）この天皇の御子等、併せて十二柱なり。故、伊玖米伊理毘古伊佐知命は天下を治める。次に豊木入日子命は上毛野、下毛野君等之祖なり。　『記』

■又の妃、紀伊国の荒河戸畔（あらかわとべ）の女、遠津年魚眼眼妙媛（とおつあゆまくはしひめ）、（一に云う、大海宿禰の女八坂振天某辺（やさかふるあまいろべ）という。）豊城入彦命・豊鍬入姫命を生む。　『紀』

豊木入日子命は「上毛野、下毛野君等之祖なり」とある。上毛野、下毛野は上野国、下野国であるという。岩波書店の『古事記』の頭注は次のように書いている。

■上（カミ）つ毛野（ケノ）は上野国。下（シモ）つ毛野は下野国。

『紀』には次のような説話もある。

（崇神）四十八年正月、天皇、豊城命・活目尊に勅して曰く、「汝等二の子、慈愛共に齊（ひと）し。知らず、いずれを嗣（ひつぎ）とせむ。各夢みるべし。朕、夢を以て占う」という。（中略）兄豊城命、夢の辞（ことば）を以て天皇に奏して曰く、「自ら御諸山に登りて東に向きて、八廻し槍を弄し、八廻し刀を撃つ。」という。（中略）

四月、活目尊を立てて皇太子とす。豊城命を以て東を治めしむ。是上毛野君・下毛野君の始祖なり。　『紀』

岩波書店の『日本書紀』の補注は次のように説明している。

- 上毛野君は上野（群馬県）を本拠とする雄族。旧事紀、国造本紀に「上毛野国造。瑞籬朝（崇神）皇子豊城入彦孫狭島命、初治平東方十二国為封」とある。（中略）
- 下毛野君は下野（栃木県）の雄族。国造本紀に「下毛野国造。難波高津朝（仁徳）御世、元毛野国分為上下。豊城命四世孫奈良別、初定賜国造」とある。（後略）

どちらの注も、上毛野君は現在の群馬県、下毛野君は現在の栃木県であるとしている。豊城命の夢にも、「御諸山に登り、東を向き」とあるから関東であろう。

しかし補注にもあるように関東の上毛野国造は「豊城入彦命の孫が初めて東方十二国を平定して治めた」とあり、下毛野国造は「豊城命の四世の孫が初めて平定して国造を賜った」とある。関東を平定しているのは豊城入彦命の孫や四世の孫である。豊城入彦命ではない。

豊城入彦命の「豊」は豊国であろう。豊前国（大分県）である。「城」は「国」や「土地」の意であろう。「豊城入彦命」とは「豊国に入った彦（人物）」という意味ではないだろうか。

『和名抄』の豊前国に「上毛郡、下毛郡」がある。豊城入彦命は豊前国の上毛、下毛に入ったのではないだろうか。その孫等が関東へ行き、上毛野国造や下毛野国造になったのであろう。豊前の地名の「上毛」が「上毛野＝上野（かみつけの、こうずけ）」となり、「下毛」が「下毛野＝下野（しもつけ）」となったのであろう。

福岡県京都郡苅田町に石塚山古墳がある。ここは旧豊前国である。『石塚山古墳の謎』（海鳥社）には石塚山古墳について次のように書いている。

□石塚山古墳

○環境

■海岸線近くまで張り出した舌状台地にある。

■四世紀初頭の古墳

○墳丘

■前方後円墳……全長約１１０m、後円部径約６０m

○内部主体

■竪穴式石室……長さ約７m、幅約1.4m

■石室の裏側にたくさんの石材がおかれていた。壁から中央の石室まで精巧な石組みをしている。

■下敷きの土層も粘土、砂、ベンガラ、玉砂利を順に重ねる手の込みようである。

■石室の造りは畿内文化の影響を受けたというよりも、文化がそのまま持ち込まれたと思われます。この古墳を造った被葬者は、土木技術者も畿内から連れてきたのだろうかという推測ができます。

○副葬品

■鏡……１１－１４面。（現存）三角縁神獣鏡７面、獣帯鏡１面

京都府椿井大塚山古墳と３面が同笵鏡

■小札革綴冑……京都府椿井大塚山古墳のものと非常によく似ている。日本最古の冑「小札革綴冑」といわれる。

椿井大塚山古墳出土の冑は多くの学者が中国、朝鮮からの舶載品と推測している。石塚古墳のものも同様と見られる。

■冑だけでなく、鉄鏃など出土した鉄製品は舶来品だった可能性が強く、大陸文化の影響を物語っている。

■勾玉１、管玉３

■鉄斧５、武器刀片１片、鉄鏃２８本以上

■多くの土器

図 33　石塚山古墳出土の鉄鏃と小札革綴冑

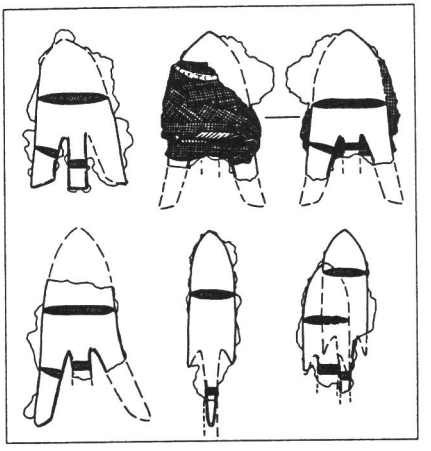
（『石塚山古墳の謎』（海鳥社）より）

石塚山古墳から出土した三角縁神獣鏡は３面が椿井大塚山古墳と同笵鏡であり、小札革綴冑も椿井大塚山古墳のものとよく似ており、中国製であろうという。石塚山古墳の被葬者は椿井大塚山古墳と同様、中国から渡来してきていると思われる。『記』『紀』にあるように崇神天皇の子の豊城入彦命の墓かもしれない。

石塚山古墳は尾根の尖端にあり、その先は海である。海から来ればこの前方後円墳はすぐ見える。

『石塚山古墳の謎』の中で長嶺正秀氏は「（石塚山古墳の）被葬者は派遣将軍的な性格を非常に強く持っているのではなかろうかと考えます。」と述べている。崇神天皇が派遣した将軍ではないだろうか。豊城入彦命の墓である可能性が高い。瀬戸内海、および豊予海峡を支配・監視していた将軍であろう。

石塚山古墳のある苅田町の隣に上毛・下毛郡がある。豊城入彦命が死去した後、子供が上毛・下毛郡へ移り、孫や四世の孫が関東へ移ったのではないだろうか。そのため豊城入彦命は「上毛野君・下毛野君の始祖なり」と書かれているのであろう。



◀石室及び埋土中出土鉄鏃
▼石室及び埋土中出土冑小札

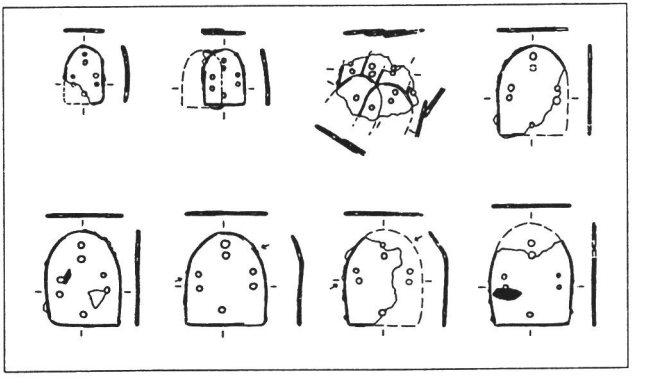


図 33　石塚山古墳出土の鉄鏃と小札革綴冑

(4) 日本最初の統一王朝

崇神天皇は中国の遼西から渡来して来て木津川の東の山城に住み着く。ここを本拠地として木津川の西の武埴安彦を伐ち、木津川流域を手中にする。その後瀬戸内海を支配するために吉備津彦や豊城入彦命を派遣する。吉備（岡山市）には吉備津彦の墓と思われる備前（湯迫）車塚古墳があり、豊国（福岡県京都郡苅田町）には豊城入彦命の墓と思われる石塚山古墳がある。

崇神天皇は南下して大和平野を侵略する。まず三輪山に居た綏靖天皇を追い出す。次に磯城に居た神八井耳命を伐ち、磐余地方を手に入れる。

その後、墨坂まで侵略して伊勢へ出るルートを押さえる。また大阪（奈良県北葛城郡香芝町）を確保して難波（大阪）へ出るルートも押さえる。大和平野は完全に崇神天皇の支配するところとなる。

その後、四道将軍を派遣して北陸・丹波・東海地方を平定する。日本列島の西半分をほぼ支配したことになる。

図 34　崇神天皇の支配領域（畿内）

崇神天皇は日本列島を最初に統一した人物である。これを「初期ヤマト王権の第 4 期（山城王権）」と呼ぶことにする。

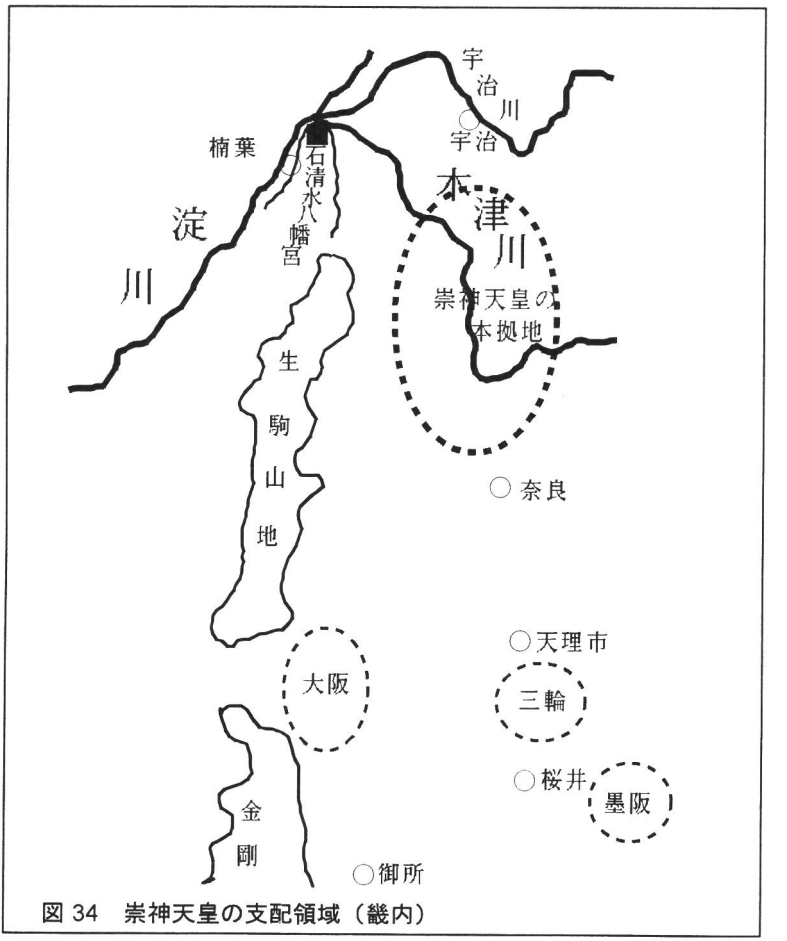


図 34　崇神天皇の支配領域（畿内）